

## 研究論文

# 共同問題解決過程としての子育て： 他者に頼ることで生じる人との付き合い<sup>1) 2)</sup>

高田 薫<sup>3)</sup>

Parenting as processes of collaborative problem solving: young mothers get involved in human relationships when they depend on others.

TAKATA Kaoru

We investigated how mothers with young children come to have relationships with others during parenting. In Study 1, 91 mothers answered questionnaires, who joined in 5 small groups in Kyoto which mothers and young children had activities together (called 'ikuji-circle' in Japanese). They were asked what troubled them, whom they depended on and with whom associated in infancy of their children. Results showed that what mothers were troubled with their children and relationships of mothers changed before and after children began to walk.

In Study 2, 49 mothers of a day care center of children in Kyoto city answered how to solve the problem in the day care center. Results indicated that some mothers solved the problem by talking to other mothers or staffs of the day care center.

The two studies suggested first that depending on others led mothers with young children to human relationships when they had something troubled with children. Second, collaboration with mothers possibly took place by solving problems together.

**Key words** : parenting, human relationships, collaboration

キーワード : 子育て , 人との付き合い , 共同

## 問題

「親になること」に関連する従来の心理学的研究には、母親の内的心理機能に着目したもの、母子関係や夫婦関係など親密な関係の中での母

親の認知に焦点をあてたもの、社会状況の中での母親の子育てに関する価値観に関するものがある。母親の内的心理機能に関しては、個のアイデンティティと関係性に基づくアイデンティティとの関連（岡本, 2002, 2003）や育児における不快感情の役割（菅野, 2001）がある。母子関係、夫婦関係に着目したものについては井上・湯澤（2002）などがある。また、マクロな視点では、変化する社会状況の中での結婚、家族、子育てへの価値観についての研究（柏木, 1998）が挙げられる。ここでいう母子関係や夫

- 1) 本研究は、私立大学学術研究高度化推進事業「学術フロンティア推進事業」(対人援助のための人間環境デザインに関する総合研究)、子どもプロジェクト(研究代表:高木和子,本学文学部教授)における研究の一環として行われた。
- 2) 本研究は日本教育心理学会第44回総会,および日本発達心理学会第14回大会で発表された。
- 3) 立命館大学文学部心理学科実習助手

婦関係とは、母親に対して直接影響を与えるミクロな関係であり、社会状況とは、母親に対して間接的な影響を与えるものである (Bronfenbrenner, 2001)。

一方、近年顕在化している、母親がともに子育てする仲間を求める動きは、子育てが母子関係の中だけでなく、より広い人との関わりの中で営まれることを示している。このことから、母親が直接関わることのできる人との関係の拡がりを捉える視点が必要になってくる。母親が育児仲間を求めるようとするのは、母親自身がひとりでは子育てできないのを意識すること (津止・藤本・斉藤, 2003) がきっかけになっていることが考えられる。1日の間には、さまざまな理由で母親が子どもの面倒を見ることができない時間が生じてくる。こうしたときに、母親は他の人を頼らざるを得ない。

本研究では、他者に頼らざるを得ない状況で、母親がどのように人と付き合っていくのかについて以下の2点から検討したい。一つ目は、子育て中に起こる日常的な問題が、子どもの発達に伴う行動レパートリーの拡大とどのように関連しているのか、また、起こった問題の性質と、手を借りることができる間柄との間に関連はあるのかについてである。就園までは、母親は自分の目の届く範囲に子どもを置いていることが多い。そのため、母親の生活や行動範囲、さらに周囲の人と関わることのできる範囲は、子どもの発達や行動との兼ね合いによって決まる可能性がある。生まれてから数年の間に、子どもの行動範囲が大きく変わるのは、歩けるようになること、つまり、子どもが自分の力で動けるようになることと、保育所などの家庭以外の場所で過ごす機会ができることである。このうち、発達に関わっており、誰もが経験すると考えられるのが、歩けるようになることである。そこで、調査1では、子どもが歩き始めることを契機に、母親が抱える子育ての問題や、周囲

との関わり方に変化が生じるか否かを調べることにする。

二つ目は、子育てにまつわる問題を解決するために、他者の手を借りるということから始めて、さらに積極的に子育ての場に参加し他者とともに問題解決にあたるということが起こりうるのかについてである。親としての振る舞いを学んでいく過程で興味深いのは、学び側がいつしか学びを支える側へ立つようになることである。親子関係においては、育てられる側の子どもはいつか育てる側に回るといふ、循環的なプロセスが生じていることが指摘されている (鯨岡, 1998)。また社会の中での子どもの発達には、中心的なメンバーに活動を支えられながら起こる (Rogoff, 1990)。親同士の活動においても、同様の循環的プロセスが起こっていると考えられる。そこで、調査2では、保育園に子どもを預ける親を対象に、保育園で生じた問題について、他者との関わりの中でどのように対処しているのかについて調べることにする。

## 調査1

### 目的

子どもが歩き始めると、それまでと比べて行動範囲が飛躍的に広がる。こうした子どもの行動範囲の変化によって、母親の子育て中の付き合い合う人の範囲や子育てで困ったことに変化が生じるのかを、育児サークルに通う母親の第1子の子育てに焦点を当てて検討することを目的とする。

### 方法

**調査対象** 京都市内および近郊で活動する5つの育児サークルに参加する母親91名。そのうち78名(85.71%)が両親と別居、72名(79.12%)が結婚もしくは妊娠・出産時期に退職、81家庭(89.01%)の子どもの数が1人ま

たは2人、80家庭（87.91%）の第1子が6歳以下であった。

**調査手続き** 4つのサークルについては育児サークルの活動中に、サークル代表者が配布、回収をおこなった。残り1サークルについては、サークル活動中に、調査者がアンケート用紙を配布、後日回答者から調査者宛に回答が返送された（回収率84.3%）。

**調査内容** 調査内容は3種類に大別された。（A）母親自身のライフスタイルとその変化に関して。（B）子どもとの関わり方について。（C）子どもの成長に伴う困ったことと人間関係の変化について。調査内容の概要については表1に示した。

**分析項目** 調査内容の（A）から（C）のうち、（C）子どもの成長に伴う、困ったことと人間関係の変化について、以下の項目を分析した。一つ目は、「第1子が歩き始めるまで」について「子育てで困ったこと（自由記述）」と「困ったときに頼りになった人（選択肢）」、「同時期に付き合いのあった人（選択肢）」であった。もうひとつは、「第1子が歩き始めてから2～3歳ごろまで」について「歩き始める前との比較で、人間関係に変化があったか否か」についての自由記述と、「子育てで困ったことに変化があったか否か」についての自由記述であった。

表1 調査1の質問紙の内容（概要）

---

（A）母親自身のライフスタイルとその変化に関して	
	両親との同別居について（選択肢）。途中で変化した場合には、変化に伴う生活と気持ちの変化について（自由記述）
	住居の形態（集合住宅／一戸建て）と転居の経験の有無、その時期（選択肢）、変化に伴う生活と気持ちの変化について（自由記述）
	転職の経験の有無とその時期（選択肢）、変化に伴う生活と気持ちの変化について（自由記述）
（B）子どもとの関わり方について	
	子どもが乳児の間に保育園に預けようかどうか迷った経験の有無とその理由について（選択肢）
（C）子どもの成長に伴う困ったことと人間関係の変化について	
	第1子が歩き始める前
	子育てで困ったこと（自由記述）
	困ったときに頼りになった人（選択肢）
	頼りになった人以外で付き合いのあった人（選択肢）
	第1子が歩き始めてから2、3歳ごろまで；歩き始める前との比較で
	付き合う人の変化の有無
	変化があった場合、新たに付き合いの始まった人となくなった人（自由記述）
	子育てで困ったことの変化の有無
	変化があった場合、新たに困るようになったことと気にならなくなったこと（自由記述）
	第2子以降が生まれた後の生活や気持ち、人間関係の変化（該当者のみ自由記述）
	子どもが幼稚園、保育園に通いだしてからの生活や気持ち、人間関係の変化（該当者のみ自由記述）

---

**結果と考察**

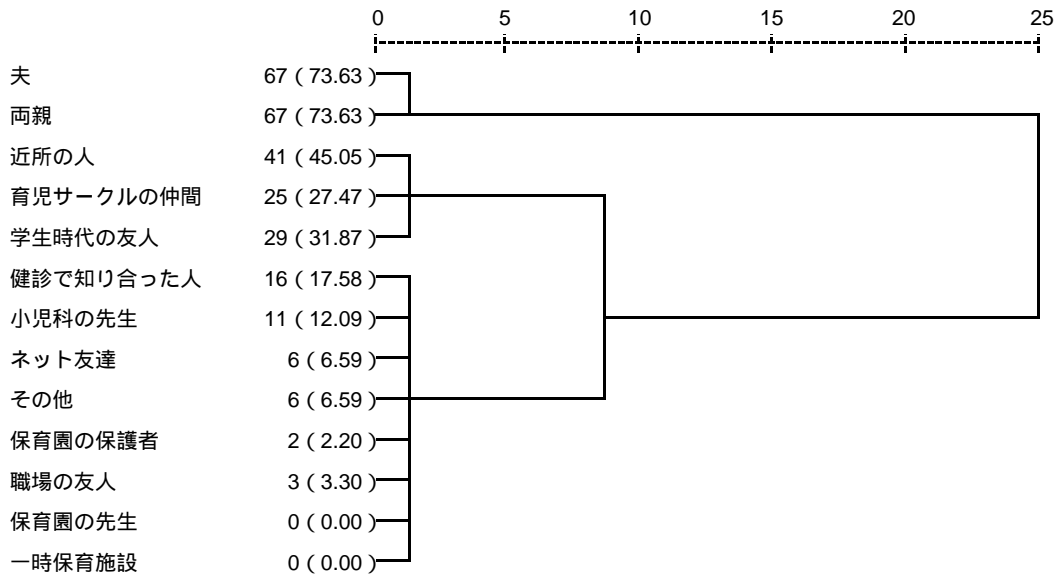
1) 第1子が歩き始めるまでの時期について最初に、子育て中に困ったことに関する自由記述の内容を表2に示した。子どもの世話や育ちに関わることのほかに、家庭生活や母親自身の生活を成り立たせることに関わる記述が多く現れていることがわかる。子どもが歩き始めるま

では、子どもの世話と家事など家庭生活を両立させていくことに関して苦労しているといえよう。

次に、第1子が歩き始めるまでの期間で困ったときに頼りになる(なった)人で選択された人数の内訳を図1に、頼りになる(なった)人とお付き合いのある(あった)人との合算の内

**表2 第1子歩きはじめるまでの時期の子育てで困ったことの内容と人数(自由記述, 複数回答)**

内 容	人数	%
子どもの世話や育ちに関すること 寝ない, 食事, 病気, 怪我, 発達	25	(25.00)
家庭生活や母親自身の生活を成り立たせることに関する記述 家事・外出・自分が病気のときに頼る人がいない 母親自身の睡眠不足	22	(22.00)
関係性に関する記述 相談相手がいない 子どもとの1対1関係	12	(12.00)
特になし	8	(8.00)
その他・不明・無回答	5	(5.00)
合 計	24	(24.00)
	100	(100.00)



**図1 第1子が歩き始めるまでの時期に頼りになる(なった)人の人数内訳とクラスター分析の結果(図内の数字は選択人数,( )内は%, 分析はワード法による)**

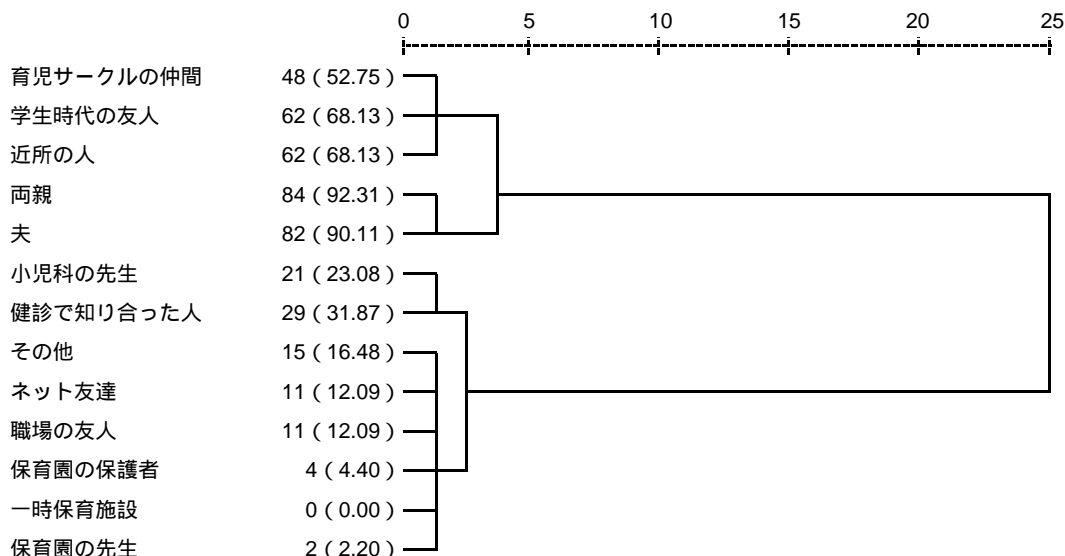


図2 第1子が歩き始めるまでの時期にお付き合いのある(あった)人の人数内訳とクラスター分析の結果(図内の数字は選択人数,( )内は%,クラスター分析はWord法による)

訳を図2に示した。また、母親の周りのどのような人が一緒に選ばれやすい傾向があるかについてクラスター分析(Word法)を行い、図1、図2に併せて示した。各選択肢が、図中の目盛り(0~25)の中で、数値の小さい部分で連結していればいる程、ともに選ばれやすいもしくは選ばれにくいことを示す。

頼りになる(なった)人に関しては、夫、両親を選択した人数がほかの選択肢と比べて圧倒的に多かった。夫と両親を両方とも選択しなかった人は8人にすぎず、夫、両親とその他の選択肢の間で選択傾向が大きく分かれている。このことから、今回の調査の対象となった母親にとっては、夫か両親のうち少なくとも一方は頼りになる存在であることがわかる。夫と両親以外の選択肢では、2つのグループに分かれており、そのうちの1つは近所の人、育児サークルの仲間、学生時代の友人から成る。これら3つについては、母親の周囲との関係の持ち方によって異なってくると考えられる。残りのグルー

プについては、母親にとっては頼りにすることが少ないか、関わりそのものがないかのどちらかであろうと考えられる。

付き合いのある(あった)人について見てみると、両親・夫のグループと、近所の人・育児サークルの仲間・学生時代の友人のグループおよびその他のグループとに大きく分かれた。近所の人、育児サークルの仲間、学生時代の友人に関しては、頼りになる(なった)人と比べて、選択人数が大きく伸びた。この3者については、困ったときに頼りできる場合と、付き合いはあるが助けてもらうところまでは行きづらい場合とがあることが示唆される。このことは、母親にとって、困る事柄が主として家の中で起こっていることであること、子どもが歩き始めるまでは、一緒に外出するのが大変であることが関係していると考えられる。子どもが歩き始めるまでの時期において、母親は家の中で身動きがとれないために困ることが多い。そのため、母親が頼りにしている者も、夫や両親のように、

表3 第1子が歩き始めてから困らなくなったこと(自由記述, 複数回答)

内 容	人数	%
子どもの育ちに関する内容		
自分でできることの増加(行動範囲・歩き・食事)	12	(15.38)
意思表示	6	(7.69)
生活リズムの安定	2	(2.56)
身体面の発達	5	(6.41)
母親の悩みに関する記述		
家事・外出がしやすくなった	4	(5.13)
問題への対処可能性	4	(5.13)
関係性への記述		
子ども同士の付き合い	2	(2.56)
保育園での関係	1	(1.28)
特になし	1	(1.28)
不明	1	(1.28)
無回答	4	(51.28)
合 計	78	(100.00)

表4 第1子が歩き始めてから困り始めたこと(自由記述, 複数回答)

内 容	人数	%
子どもの育ちに関する内容		
行動範囲の拡大に伴う危険の増加	29	(34.94)
自己主張	6	(7.23)
寝ない・しつけ	4	(4.82)
その他	3	(3.61)
母親の悩みに関する記述		
母親の生活にゆとりがなくなった	4	(4.82)
関係性への記述		
子ども同士の付き合い	7	(8.43)
親同士の付き合い	4	(4.82)
第2子との関係	1	(1.20)
その他・不明	2	(2.41)
無回答	23	(27.71)
合 計	83	(100.00)

初めから家の中にいるか、家の中へ入り込んで  
も差し支えない関係の者が多いと考えられる。

2) 第1子が歩き始めてからの変化について  
回答者91名のうち8名は第1子がまだ幼いた

めに、第1子が歩き始めてからの変化について  
は記述がなかった。よって、以下では83名の回  
答を分析の対象とした。

子どもが歩き始めて困らなくなったことを表  
3に、困り始めたことを表4に示した。困らな

なくなったことと困り始めたことのどちらの記述についても、子どもの育ち、母親の悩み、関係性の3タイプに大別することができた。表3より、歩き始めるまでに困っていたことが、子どもの発達とともに、解消される可能性のあることが示唆された。興味深いのは、歩き始めるといふ発達現象やそれと同時に起こる現象が、一方では自分でできることの増加と捉えられ、他方では危険の増加と捉えられていることである。すなわち、同じ発達現象が、母親にとっては困ったことの解消につながる一方で、新たな困ったことを引き起こす可能性がある。

新たに付き合いはじめた人の内訳を表5に、付き合いがなくなった、もしくは激減した人に

ついでの内訳を表6に示した。育児サークルや幼児教室、あるいは公園で知り合いになった人など、子育てを介して新たな付き合いが生まれる一方で、出産以前や前後の知り合いとは付き合いが減っていることがわかる。このことから、子どもが歩き始め行動範囲が広がることで、母親にとっても「母親として付き合うこと」が増えることが考えられる。

調査1より、子どもが歩き始める以前には、「子どもを世話する」ことに基づいた付き合いがあり、歩き始めてからは、子どもとともに周囲に出て行くことで関係が作られてくる機会が増えることがわかった。また、子どもが発達するに伴って、母親の困ったことは変化していくが、

表5 第1子が歩き始めてから付き合いが始まった人の内訳（自由記述，複数回答）

内 容	人数	%
育児サークルや幼児教室で知り合った人	28	(28.00)
公園で知り合った人	16	(16.00)
同年代の子どもを持つ母親	5	(5.00)
地域に住んでいる人	6	(6.00)
幼稚園，保育園の知り合い	5	(5.00)
同じ習い事の人	4	(4.00)
その他	3	(3.00)
変化なし	20	(20.00)
無回答	13	(13.00)
計	100	(100.00)

表6 第1子が歩き始めてから付き合いがなくなったまたは激減した人の内訳（自由記述，複数回答）

内 容	人数	%
独身の友人	3	(3.23)
子どものいない知人，友人	4	(4.30)
独身時代の友人	7	(7.53)
元職場の友人	3	(3.23)
妊娠・出産時期の知人（母親教室，産院，健診など）	5	(5.38)
その他	8	(8.60)
特になし	6	(6.45)
変化なし	20	(21.50)
無回答	37	(39.78)
計	93	(100.00)

歩き始めるといふ発達現象が、母親にとってはプラスとマイナスの意味を持ちうる事が示唆された。子どもの発達によって、母親が付き合い範囲が変わってくる。こうした付き合いの範囲によって、対人関係における問題対処のあり方も変わってくる可能性がある。また、子どもの世話を頼むか、子ども同士や親同士で遊ぶかなど、付き合い方の違いもこうした問題対処のあり方に影響している可能性があるだろう。

## 調査2

### 目的

保育園でともに子育てする関係をベースにして、親同士が共同して問題に対処していくことが可能になりうるかについて、親へのアンケート内容から検討することを目的とする。調査対象となった保育園の特徴は、子どもと親、保育者の相互の関係を大切にしていることである。三者の相互関係を形づくる場として、行事やクラス懇談会が位置づけられている。保育者側は、保護者会の自主的な活動をサポートすることや、親と協力して行事を組み立てていくことを積極的にやっている(村上, 2002)。保育園の運営に関わる中で、親は何を参加の動機とし、どのように問題へ対処しようとしているのかを明らかにする。

### 方法

**調査対象** 京都市内の保育園に子どもを通園させている134家庭。49家庭より回収された(回収率36.57%)。回答者の1家庭あたりの在園児数は、1人が38家庭、2人が9家庭、3人が2家庭であった。各家庭在園児のうち一番上の子どもの年齢(クラス)は、0歳が8名、1歳が4名、2歳が6名、3歳が10名、4歳が9名、5歳が12名であった。

**調査手続き** 園児を通じてアンケート用紙を

配布し、保育園事務室に設置した回収箱を通じて回収した。

**アンケート内容** (1)基礎データ：在園児の人数と年齢、保育園への関与年数。(2)生活発表会についての感想。(3)保育園生活全般について：H保育園を希望した理由、活動への参加頻度と参加したときに感じたこと、保育方針についての意見、子どもが保育園で生活することに関して。いずれも選択肢もしくは自由記述による回答であった。

### 結果と考察

保育園活動全般に関する項目のうち、活動へ参加したときに感じたことと保育方針についての意見について分析を行った。

1) **保育園活動に参加して楽しかった点と大変だった点** 「保育園活動に参加して楽しかった点」と「大変だった点」についての自由記述の内容を表7と表8に示した。参加して楽しかった点については、「保護者同士が交流できること」と、「子どもの成長を見ることができると」答えた人が多く出現した。大変だった点については、「委員会や行事、活動の準備が大変」だと答えた人が多かった。このことから、この保育園に子どもを預けている親にとって、子どもの成長だけでなく、親同士の交流が、活動参加への大きな動機になっているといえる。また、活動に参加することは、親にとってプラスとマイナスの両方の意味を持つものであると言える。

**表7 保育園活動で楽しかった点(選択肢,複数回答)**

内容	人数	%
保護者同士の交流	21	(38.89)
子の成長を見ることができた	15	(27.78)
親子で参加できたこと	5	(9.26)
その他	5	(9.26)
無回答	8	(14.81)
合計	54	(100.00)



2) 保育園の方針に賛同できないときの対処  
 保育園活動に賛同できる点が多いか少ないかを聞いたところ、「多い」が38人(77.55%)、「少ない」が0人(0%)、「どちらともいえない」が10人(20.40%)、無回答が1人(2.04%)であった。また、対処方法における各選択肢の選択頻度を表9に示した。「園長や担当保育者と話し合いをする」ことや「他の親と相談する」と答えた親が3割前後見られたことから、活動への問題点について、他者と共有しながら対処していこうとしている親がいることが示された。

表8 保育園活動で大変だった点

内容	人数	%
委員会・行事・活動の準備が大変 (日程調整含む)	26	(49.06)
他の保護者への対応	4	(7.55)
活動目的への疑問	2	(3.77)
行事に参加する子の大変さ	3	(5.66)
その他	5	(9.43)
特になし	1	(1.89)
無回答	12	(22.64)
合計	53	(100.00)

表9 保育園の方針に賛同できないとき対処方法

内容	人数	%
園長や担当保育者と直接話をしに行く	20	(32.26)
他の保護者と相談する	17	(27.42)
特になし	10	(16.13)
考えたことがないのでわからない	5	(8.06)
その他	6	(9.68)
無回答	4	(6.45)
合計	62	(100.00)

アンケートの回答率が低いことから、他者と共同して問題解決に当たっている親が、当該保育園全体でどの程度の割合を占めているのかについては、慎重に議論する必要がある。子育て

と、家事・仕事の合間にアンケートに回答することは親にとって負担のかかる作業であるため、回答者は普段から保育園活動へ積極的に参加している可能性があるからである。また、回答者と未回答者とで、保育園活動への参加の仕方と、かかわり方が異なっている可能性についても考慮する必要があるだろう。

## 討論

本研究では、子育て中の母親が問題に対処する際に生じると考えられる人との付き合い方のありようについて、他者に頼るという視点から検討することを目的として、2つの調査が行われた。

調査1では、子どもが歩き始める前後で、母親が手を借りたいと思う事柄がどのように異なっているのか、また手を借りることのできる関係にある人や、付き合う人に変化は生じるのかについて調査を行った。対象は育児サークルに通う母親であった。その結果、子どもが歩き始めるまでは、母親は子どもの世話と家事を両立させていくことについて苦労しており、家の中で子どもを世話してもらえることに基づいた関係があることが示唆された。次に、子どもが歩き始める頃から、子どもと共に周囲へ出て行くことで関係が作られていく機会が多くなることが示された。また、子どもが歩き始めることで、母親の苦労の多くは解消していくが、安全面など新たな苦労を生み出していくことも分かった。つまり、子育て中の母親の苦労は、子どもの発達に伴い変化し、子育て中に苦労している点の変化や子どもの発達に伴い、周囲との関係も変わっていくといえるだろう。

調査2では、保育園とともに子育てする関係をベースにして、親同士が共同して問題に対処することが可能になるかどうかを検討した。保育園の方針に賛同できない場合、保育園側や他

の親と話をしてお互ししようとする親がいることが示された。今回の調査からは、積極的に他者と関わり、問題に対処しようとする親の割合および、未回答者の活動参加の姿勢を明らかにすることができなかった。たとえば、積極的に他者と関わろうとしない場合でも、他者から働きかけられたら一緒に対処しようとするか、その働きかけを避けようとしたり、働きかけそのものがない場合とでは参加の仕方は異なってくると考えられる。こうした参加のパターンについて、検討する必要があるだろう。

2つの調査から、子育てに関して他者に頼ることから親と周囲との対人関係が生じること、その対人関係は子どもの発達に伴い変化していくこと、またその対人関係の中で、親同士が共同して問題に対処していくようになりうるということが示唆された。ただし、調査1では、育児サークルに参加している母親が、調査2では保育園に子どもを通園させる母親が対象となっており、両者では、生活の送り方や対人関係の範囲が異なっていることが考えられる。今後、こうした違いに関わらず共通する部分と、異なる部分とを検討していく必要があるだろう。

また、本研究でとりあげた、親が周囲と関わる契機としての他者に頼ることとは、頼れる人が身近にいることを前提としている。調査を行った京都市およびその近郊では、地域の人とひととのつながりが薄れてきているとはいえ、地域の活性化に向けての新たな取り組みが活発に行われている（津止, 2001）ために、こうした調査が可能であったともいえる。こうした場において、子育てという営みを支える態勢が、母親の周りに整っている一方で、子育てを支える関係が母親の身近にない場合には、本研究とは異なる関係の持ち方があることが考えられる。子育てを支える関係が母親の周りにどの程度あるのかということと、子育てを支える場において何が準備されているのかの両面から、子育て

期における親の人との関わりの様相と、共同での問題解決のあり方を位置づけていくことが必要であろう。

## 謝辞

予備調査実施にあたり、刈谷市教育委員会の清水美智子先生、京都市西陣民生主任児童委員の岡山恵子氏、京都市ゆりかご保育園の川島由里子氏にご協力をいただいた。本調査実施に際しては、京都子育てネットワーク代表の藤本明美氏、専門職ボランティアグループほっとスペースゆう代表の工藤充子氏、京都市蜂ヶ岡保育園園長の中西京子氏、本学産業社会学部の津止正敏教授にご協力をいただいた。記してお礼申し上げます。また、アンケート調査にご協力くださったお母様方に厚くお礼申し上げます。

## 文献

- Bronfenbrenner, U. (2001). Ecological models of human development. In M. Garvain & M. Cole (Eds.) *Readings on the development of children, 3rd edition*. NY: Worth Publishers. pp. 3-6.
- 井上芳世子・湯澤正通. (2002). 夫・子どもとの関係、対人態度が母親としての成長に及ぼす影響. *心理学研究*, 73, 431-436.
- 柏木恵子. (1998). 社会変動と家族発達：子どもの価値・親の価値. 柏木恵子（編）. *結婚・家族の心理学：家族の発達・個人の発達*. ミネルヴァ書房. pp. 5-50.
- 鯨岡峻. (1998). *両義性の発達心理学：養育・保育・障害児教育と原初的コミュニケーション*. ミネルヴァ書房.
- 村上文. (2002). 保育は保護者と結んだ輪の中に. 高木和子・蜂ヶ岡保育園（編著）. *雨あめ降れふれ：ぼくら蜂ヶ岡の子どもやもん*. かもがわ出版. pp.192-195.
- 岡本祐子（編著）. (2002). *アイデンティティ生涯発達論の射程*. ミネルヴァ書房.
- 岡本祐子. (2003). 子育て期におけるアイデンティティの相互性：「個としてのアイデンティティ」

と「親アイデンティティ」の発達を支えるもの。日本発達心理学会大会発表論文集, S70.

Rogoff, B. (1990). *Apprenticeship in thinking: cognitive development in social development*. London, Oxford University Press.

菅野幸恵. (2001). 母親が子どもをイヤになること：育児における不快感情とそれに対する説明

づけ. 発達心理学研究, 12, 12-23.

津止正敏・藤本明美・斉藤真緒（編）（2003）. 子育てサークル共同のチカラ：当事者性と地域福祉の視点から. 文理閣.

津止正敏（2001）. 福祉とコミュニティ：地域福祉臨床の視点. 立命館人間科学研究, 2, 133-149. (2003.12.23. 受理)